

## 序 シンポジウムの概要

### 1. シンポジウムの企画

乳幼児の多くは家庭で保育されており、子育てに対する不安や悩みなどを抱えながら孤立して子育てをしている親が地域に増えている。あしたの日本を創る協会では、こうした家庭で子育てをしている親を対象にした、地域の人たちによる子育て支援活動を広め、活動を活発にしていくことをねらいに、「地域ぐるみで子育て支援」をテーマにした「子育て支援に取り組む地域活動推進シンポジウム」を開くことにした。

シンポジウムは、福島県郡山市、横浜市港北区、岐阜県可児市、滋賀県草津市、熊本県御船町の全国5カ所で、あしたの日本を創る協会の事務局と、シンポジウム開催地の生活学校や子育て支援団体の方々と、協働で開いた。9月から企画を始め、12月頃までにシンポジウムの具体的な内容を決め、シンポジウムは2007年1月中旬から2月下旬までに開催した。

なお、シンポジウムの具体的な内容は、その開催地の子育て支援の活動状況や生活学校、子育て支援団体の方々の希望に合わせて決定するように心がけた。また、地元の子育て支援団体や担当行政の助言も受けた。各地域でのシンポジウムの打ち合わせは、以下のように進めた。

#### (1) シンポジウム開催地との打ち合わせ

シンポジウムが開催される地域の生活学校や子育て支援団体の方々と打ち合わせを実施した。

打ち合わせ場所	日程及び担当者	打ち合わせ内容
福島県郡山市 総合体育館	2006年10月13日 担当：峯	・郡山市生活学校連絡協議会のメンバーにシンポジウムの企画内容について説明。 ・シンポジウムのテーマ、活動事例、助言者、運営に関して話し合う。
横浜市中区 シルクセンター	2006年10月14日 担当：峯	・子どもの文化環境を考える会代表の五十嵐マリ子さんにシンポジウムの企画内容について説明。 シンポジウムの企画・運営は子どもの文化環境を考える会で実施した。
岐阜県可児市 広見公民館 ゆとりピア	2006年10月23日 担当：峯	・可児市生活学校のメンバーにシンポジウムの企画内容について説明。 ・シンポジウムのテーマ、活動事例、助言者、運営に関して話し合う。
岐阜県可児市 可児市役所	2006年10月23日 担当：峯	・可児市こども課の古山隆行課長より、可児市の子育て・子育て支援の現状を伺う。 ・シンポジウムの企画内容について説明、協力を要請。 以降、古山課長とは活動事例発表、助言者、パネラーに関して助言を得る。

岐阜県大垣市 大垣市子育て 交流プラザ	2006年10月24日 担当：峯	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ N P O 法人くすくす理事長の安田典子さんにシンポジウムの企画内容について説明。</li> <li>・ シンポジウムの活動事例、助言者の紹介を得る。 尚、活動事例に関しては、安田さんの助言をもとに名古屋市天白区の天白子ネット代表の奥田陸子さんから情報提供を受けた。</li> </ul>
滋賀県草津市 市民交流プラザ	2006年10月24日 担当：峯	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 滋賀県生活学校運動推進協議会のメンバーにシンポジウムの企画内容について説明。</li> <li>・ シンポジウムのテーマ、活動事例、助言者、運営に関して話し合う。 尚、活動事例に関しては、大津市子育て総合支援センター副所長の西田久美子さんから情報提供を受けた。</li> </ul>
熊本県御船町 御船分館	2006年11月2日 担当：峯	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ N P O 法人子育て談話室理事長の柴田恒美さんにシンポジウムの企画内容について説明。</li> <li>・ シンポジウムのテーマ、活動事例、パネラーに関して話し合う。 尚、活動事例、パネラーに関しては、N P O 法人子育て談話室理事長の柴田恒美さんから情報提供を受けた。</li> </ul>
愛知県日進市 R i n のおうち	2006年12月27日 担当：峯	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ N P O 法人ファミリーステーション R i n 代表理事の牛田由美子さんに、シンポジウムのねらい、進め方について説明。</li> <li>・ 事例発表の内容について話し合う。</li> </ul>
岐阜市 岐阜県庁 総合企画部	2006年12月27日 担当：峯	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 岐阜県総合企画部の古川芳子次長（少子化対策担当）に、シンポジウムのねらい、進め方について説明。</li> <li>・ ワークショップのねらい、テーマ、全体協議について話し合う。</li> </ul>

## （２）報告書の執筆

シンポジウム報告書の執筆分担は、下記の通りである。

- ・ 石井 久雄：第7章、
- ・ 角替 弘規：第6章
- ・ 渡辺 恵：第8章
- ・ 遠藤 宏美：第9章
- ・ 丹治 恭子：第10章

## 2．シンポジウムの評価

次に、参加者によるシンポジウムの評価について検討してみたい。今回のシンポジウムは5会場で行ったが、統一形式のアンケートを行わなかった横浜を除く、4会場のアンケート結果

を取り上げる。アンケートに回答したのは122名で、その内訳は郡山40名、可児32名、草津20名、御船30名である。

以下では、「参加者の属性」、「事例報告・パネルディスカッションの評価」、「シンポジウムの効果」の3つの側面からアンケート結果をみていくことにする。

### (1) 参加者の属性

参加者は、どのような人々だったのであろうか。「参加者の性別」をみると、女性が8割占めており、圧倒的に女性の参加者が多い(図1参照)。「参加者の年齢層」をみると、60代の方が32.8%と、50代の方が32.0%と多く(図2参照)、50代と60代の方々が参加者の6割を占めている。



図1 参加者の性別(%)



図2 参加者の年齢層 (%)

### (2) 事例報告・パネルディスカッションの評価

事例報告やパネルディスカッションの評価について、「事例報告・パネルディスカッションの内容」についてみると、「とても良かった」と答える者が47.5%、「まあ良かった」と答える者が48.4%となっており、合わせて9割以上の者が、事例報告やパネルディスカッションは「良かった」と答えている(図3参照)。参加者の満足感が伺える。「事例報告・パネルディスカッションの時間配分」では、64.8%の者が「ちょうど良い」と答えているが、「長かった」と答えた者が23.8%あり、時間配分を検討する必要がある(図4参照)。



図3 事例報告・パネルディスカッションの良さ(%)



図4 事例報告・パネルディスカッションの時間配分(%)

### (3) シンポジウムの効果

シンポジウムの効果について、参加者にどのような影響を与えたのであろうか。ここでは、様々な影響から、その1つについて検討する。図5にあるように、参加者の6割近くの者は、既に何らかの子育て支援の「活動をしている」が、4割弱の者は「活動していない」。「活動

していない」と回答した者のみに（48名）、「今日の話聞いて、子育て支援に関わるボランティア活動に参加してみたいと思いましたか」と訊いたところ、18.8%の者が「すぐにでも参加してみたいと思った」と答え、62.5%の者が「今はできないが、機会があれば参加してみたいと思った」と答えている（図6参照）。活動する時期はともかくとして、8割の者が、子育て支援活動に参加したいという意欲をかき立てられたのである。子育て支援を活性化させるささやかなきっかけとして、今回のシンポジウムが役立ったといえそうである。

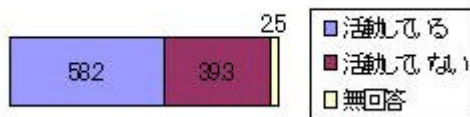


図5 子育て支援活動への参加有無(%)

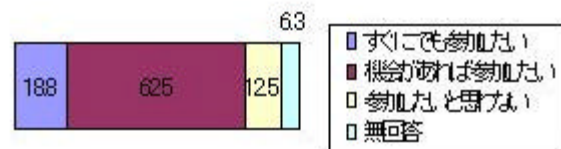


図6 子育て支援活動への参加欲求(%)

おわりに

アンケートの自由記述の部分については掲載することはできなかったが、「シンポジウムのアンケート」の結果をみるかぎり、今回のシンポジウムは概ね好評であったといえる。シンポジウムの成功を支えたのは、事例発表やパネラー等の素晴らしさであるのはもちろんこと、受付や会場設営等々の運営スタッフの尽力も忘れてはならない。多くの方々の努力が、アンケート結果の数字にあらわれているのであろう。

（事務局・峯 佳孝）